九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元末明初の古書辨偽 ： 宋濂・方孝孺を中心として

青木, 洋司
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18227

出版情報：中国哲学論集. 34, pp.42-60, 2008-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

元末明初の古書辨偽

―宋濂・方孝孺を中心として―

青木洋司

前言

元末明初は、理学から心学への過渡期として位置付けられることが多い。[1] この時代は、宋代や明代とは異なり、思想史上、経学史上に注目すべき学説が出現しなかったとされ、注目されることは少なかった。しかし、近年、宋代と明代の思想を対立的に捉えるのではなく、両者に通底する部分を理解しようとする視点が現れ、元末明初にも光が当てられるようになった。[2] その一つである三浦秀一氏の研究は、十三世紀の心学的傾向を持つ学者に焦点を当て、「心学」という概念を用いつつ、単に儒学に留まらず、広く仏教や道教の動向にまで考察を巡らすものであり、[3] 理学や心学といった枠組みから脱却するものとして注目される。

本稿は、これらの流れを受けつつ、元末明初の思想の一端を明らかにするために、宋濂（一三一〇～一三八一）と方孝孺（一三五七～一四〇二）の古書辨偽と呼称される著作を検討する。

古書辨偽は、いわゆる「辨偽」の学の中に位置付けられ、主として古書を鑑別する作業とされる。[4] この古書辨偽は、宋濂や方孝孺に至るまでに柳宗元の「辨列子」や「辨文子」以来、鄭樵の『通志』、高似孫の『子略』、晁公武の『郡斎読書志』、王応麟の『困学紀聞』、黄震の『黄氏日抄』などの論著が存在し、元末明初に至るまでに一定の蓄積がな

されている。「古書辨偽」という観点に立つならば、これらの論著を中心とし、一種の学術史を設定することも可能であろう。だが、彼らは果たして、純粋に古書を鑑別するために、この種の論著を著したのであろうか。むしろ、彼ら自身の思想構造を分析する中で、正しく位置付けられるべきではないだろうか。

本稿は、元末明初の古書辨偽が、如何なる目的のもと、如何にして古書を分析したかを明らかにするものである。そのために、本稿では宋濂とその高弟の方孝孺の古書辨偽を分析していく。

なお本稿では、宋濂に関する引用文は、『宋濂全集』[5]所収のものを用い、方孝孺に関しては、四部叢刊本『遜志斎集』を用いる。

一、「諸子辨」について

宋濂、字は景濂、号は潜溪、龍門子など。官にちなんで、宋太史、太史公とも称される。

宋濂が「諸子辨」[6]（一名、「龍門子」）を著したのは、朱元璋に仕官する以前、元末の兵乱のさなか、順宗の至正十八（一三五八）年、四十九歳の時である。

この「諸子辨」では、『鬻子』、『管子』、『晏子』、『老子』、『文子』、『関尹子』、『亢倉子』、『鄧析子』、『鶡冠子』、『子華子』、『列子』、『曾子』、『言子』、『子思子』、『慎子』、『荘子』、『墨子』、『鬼谷子』、『孫子』、『呉子』、『尉繚子』、『尹文子』、『商子』、『公孫龍子』、『荀子』、『韓非子』、『燕丹子』、『孔叢子』、『淮南鴻烈解』、『揚子法言』、『抱朴子』、『劉子』、『文中子中説』、『天隠子』、『玄貞子』、『金華子』、『斉丘子』、『罄隅子』、『周子通書』、『子程子』の諸書について考察がなされている。

先ずは、宋濂が「諸子辨」を著した目的を確認したい。その目的は、「諸子辨」の自序に以下のように記されている。[7]

諸子辨とは、何ぞや。諸子を辨ずるなり。通じて之を諸子と謂ふは何ぞや。周秦以来、作者一姓ならざればなり。作者一姓ならずして其の言を立つるは何ぞや。人人殊なればなり。先王の世、道術咸な一孔より出づるに、此れ

其の人人殊なるは何ぞや。各おの私知を奮ひて、或いは大道に盭(もと)ればなり。曰はく、或いは大道に盭るや、其の書亡ぶと雖も、世復た依倣して之を托する者有ればなり。然らば則ち子将た奈何せん。辞して之を辨ずるなり。曷為ぞ之を辨ぜんや、と。惑ひを解くなり。[8]

この自序で、宋濂は「諸子辨」の制作目的として、周秦以来、各人が賢しらな知恵で大道を破っているとし、そのようなものは、仮に書物が無くなったとしても、必ず再び世の中に出現するとする。それを防ぐために、「辞して之を辨じ」て、世人の「惑いを解」くことを目的とする。「諸子辨」は、諸子や諸子の書に一定の価値を見出す立場と言うよりは、聖賢と諸子との差異を明らかにし、聖賢の道や、その書を顕彰することに重点が置かれている。この点が「諸子辨」の目的であり、古書の鑑別にその主眼が置かれていたのではない。[9]

では、その対象となり、辨ずべき「諸子」とは、如何なるものであったのだろうか。宋濂における「諸子」とは、彼自身が諸子の祖であると考えた鬻熊の『鬻子』から、周敦頤の『周子通書』、二程の『子程子』(『程子粹言』)に到るまでの諸家を指す。これは「諸子辨」の後序に以下のように理由を示している。

諸子辨数十通を作り、九家者流、頗る具に有り。孔子門人の書、宜しく尊びて之を別つべし。今、亦た俯して其の列に就くは、儒家の言に備へんことを欲すればなり。之を始むるに『鬻子』を以てし、之を終ふるに周程を以てするは、読者に帰宿する所有らんと欲すればなり。[10]

ここに見えるように、「諸子辨」においては、孔子門人の書も九流者流に加わっているのであるが、これは九流に合わせるために便宜的に行ったものである。また読者に落ち着き所を示すために、諸子の祖の『鬻子』から書き起こし、周敦頤や二程の書を末に列している。末尾に読者の落ち着き所として、周敦頤や二程の書を配列していることは、宋濂の学術を考える上で、注意を要する点である。

宋濂は、世人の惑いを解き、読者に落ち着き所を示そうとしたのであるが、如何なる態度で、古書の鑑別を行ったのであろうか。言偃(子游)の著作とされる『言子』が、言偃の自著ではないことを論じた後に、以下のようにいう。

大抵、古書の今に存する者は、多く後人の手に出づ。『孔子家語』の如きは孔安国の録する所の壁中の文と為す

と謂ふも、往往にして多く『左伝』・『礼記』の諸書を鈔す。特だ稍や其の辞を異にするのみ。善く読む者は、固より敢へて之に与せず。世に伝ふる賈誼の『新書』は誼の作る所と謂ふも、亦た過秦論・弔湘賦に因りて、而も雑ふるに『漢書』中の語を以て之に足すに過ぎず。誼の本書に非ざるに似たり。此れ猶ほ附麗する所有りて然り。[11]

本条にいう「大抵、古書の今に存する者は、多く後人の手に出づ」が、古書に対する宋濂の見解である。本条で、宋濂は『孔子家語』や賈誼の『新書』を例に取って、古書は後人の手によるものが多いことを論証している。例えば、『孔子家語』は、『左伝』や『礼記』から作られた書であるとし、また賈誼の『新書』も、『漢書』の語句を用いて作られた書であるとする。この視点からは「諸子辨」に見える宋濂の見解が鋭いことが窺い得よう。

以下、「諸子辨」を具体的に分析していくのであるが、便宜的に三点に分け、その手法の大綱を挙げておく。宋濂の手法に関しては、文章の鑑識も存在するが、[12] 特に重要なのは以下の三点にまとめられる。

1、書誌分析および旧説の整理
2、語彙分析
3、道を基準とした分析

この三点が、有機的に「世人の惑いを解」き、聖賢と異端との差異を明らかにするという目的に向かっているのは言うまでもない。この三点の中で最も注目すべきは、「道を基準とした分析」であろう。以下、順を追って検討していきたい。

二、書誌分析

「諸子辨」で、最も多く見えるのは書誌分析である。これは南宋において古書の鑑別を行った高似孫（生卒年未詳）や黄震（一二一三～一二八〇）ともに行うものであり、古書を鑑別する際の最も基礎的な手法である。ここでは、鬻熊の著作とされる『鬻子』に対する考察から、宋濂の書誌分析について検討していく。

『鬻子』一巻、楚の鬻熊の撰。熊、周の文王の師と為り、封ぜられて楚の祖と為る。著書二十二篇、蓋し子書の始めなり。芸文志、之を道家に屬し、而も小説家に又た別に十九巻を出だす。今の世に伝ふる所は、祖無択の蔵する所より出で、十四篇に止まる。『崇文総目』は、「其の八篇已に亡ぶ」と謂ふ。信なり。其の文は質、其の義は弘、実に古書為るは疑ひ無し。第だ年代久邈し、篇章舛錯し、而も漢儒補綴の手を経、要するに完書為るを得ず。黄氏疑ひて戦国の処士の託する所と為すは、則ち非なり。序に称す、「熊、文王に見ゆる時、年已に九十」と。其の書頗る三監・曲阜の時事に及ぶ。蓋し熊の自著に非ず。或いは、其の徒、政と名ある者の記する所か。然らずんば、何ぞ「昔、文王、鬻子に問ふこと有り」と称すること有りと云はん。[13]

宋濂は、『鬻子』は『漢書』芸文志では、十九巻とあるが、現在のテキストは十四篇であるという点に注目し、考察を展開している。以下、本条での議論を確認していく。

第一に、北宋に編纂された『崇文総目』に「其の八篇已に亡ぶ」とあるが、それは事実であり、さらに文の性質から見ても古書であるとする。しかし、漢代の儒者による補綴を経ているため、完全な古書ではないとしている。

第二に、黄震の『鬻子』の作者を戦国の処士とする説を退け、[14]さらに『鬻子』の序に「熊、文王に見ゆる時、年已に九十」と記されているが、本文中に、「三監の乱」や、成王が周公を曲阜に封じたことが記載されており、これが史実であれば、鬻熊が百余歳になることから、鬻熊の自著でないとしている。

第三に、作者について考察し、『鬻子』に、しばしば見える「政曰はく」の記述から、「政」なる名の人物の著作であると推定している。

この考察で最も注目を引くのは、『鬻子』を「漢儒補綴の手を経」とするように、書物の中には、後世の補綴を経ているものが存在するという指摘である。宋濂のこの態度は、先に見た「大抵、古書の今に存する者は、多く後人の手に出づ」と同様のものである。

先述したように、書誌分析は、古書の鑑別の基礎的な手法であり、宋濂に至るまでにも広く行われていた。宋濂は、南宋の諸家に較べて時代が下る分、引用可能な書目が増加しており、『漢書』芸文志や『新唐書』芸文志のほか、『崇

文総目』、『郡斎読書志』、『直斎書録解題』、『中興館閣書目』[15]、『李氏書目』[16]などを利用し、現在のテキストとの異同を探っている。

このほか、書誌分析と同様のものとして、旧説の整理が挙げられる。宋濂は、元末に至るまでの古書の鑑別に関する旧説を批判的に継承し、その正確度の向上を目指している。宋濂は「諸子辨」において、高似孫の『子略』や黄震の『黄氏日抄』の二書を中心として、柳宗元、朱熹、葉適、唐仲友、洪興祖、周氏[17]らの諸家の説を引用している。宋濂は、元末に至るまでの旧説を幅広く取り入れ、「諸子辨」に援用している。

ここで注目すべきは、単に朱子学者のみに止まらず、朱熹と敵対した葉適、唐仲友、高似孫に対しても、公平に扱っていることである。これは宋濂が学者として比較的公平な立場を維持していたことを示すものである。

三、語彙分析

語彙分析とは、該書の語彙の中に当該時代の語彙とは異なる語彙が存在するという指摘である。「諸子辨」では、書誌分析とともに語彙分析が行われている。この二点が、文献学的手法であり、評価されることが多い。以下、語彙分析について検討したい。尹文の著作とされる『尹文子』に関する考察の後に、次のようにいう。

『六韜』は、周の呂牙より出づと謂ふも、而れども「避正殿」の語有り。殊に「避正殿」は乃ち戦国の後の事なるを知らず。『爾雅』は、以て周公の制する所と為すも、而れども「張仲孝友」の言有り。殊に張仲は乃ち周の宣王の時の人なるを知らず。予嘗て古書の真偽を験すに、毎に是れを以て之を求むれば、思ひ半ばに過ぐ。又た況んや文辞の気魄の古今絶然として同じくすべからざるをや。予因りて統の序、蓋し後人の依托する者なるを知る。ああ、豈に独り序のみならんや。[18]

この考察では注目すべき二つの議論がある。

第一に、『六韜』は、呂牙（呂尚）の著作とされるが、『六韜』の本文中に戦国以後に用いられる「正殿を避く」と

いう語があることから、呂牙の著作ではないとしている。

第二に、『爾雅』は、周公旦の著作とされるが、周の宣王の時の人である張仲の名が見えることから、周公旦の著作ではないとしている。

このほか、『亢倉子』に対する考察[19]では、従来の諸家の議論では見られなかった、避諱の問題を取り上げ、『亢倉子』が偽書であることを論証している。

宋濂は、これらの考察に代表されるように、語彙を分析し、古書の鑑別に応用している。さらにこの考察では、「予嘗て古書の真偽を験すに、毎に是れを以て之を求むれば、思ひ半ばに過ぐ」とするように、宋濂が語彙分析に力を注いでいたことがわかる。

以上、書誌分析、語彙分析の二つの手法は、非常に理解しやすいものである。これらは、後の清朝考証学に代表される「文献批判」的な手法であり、この書誌分析や語彙分析が疑古派を中心として評価され、「辨偽」の学の一部として位置付けられることになった。しかし、先述したように「諸子辨」は古書の鑑別を目的として著された著作ではなく、あくまでも聖賢を顕彰することに重きが置かれている著作である。

さて、「諸子辨」にみえるもう一点の手法の「道を基準とした分析」は、問題が少なからず存在する点であるが、これこそが宋濂の「諸子辨」の目的である「聖賢の顕彰」に最も近く、重要な点であり、その特徴を表すものである。以下、この「諸子辨」における「道を基準とした分析」を分析していく。

四、道を基準とした分析

元末明初における一連の古書辨偽の著作とされるもので、最も大きな意味を持ち、その為に批判を受けたものこそ、道を古書の鑑別の判断基準とする点である。この道を基準とした分析が、後世、批判を受けたのである。

例えば、疑古派の顧頡剛（一八九二～一九八〇）は、「諸子辨」に対し、校訂し、出版するなど一定の評価をした

ものの、「その著作は今日ではもはや無価値だ」とし、その手法も董仲舒が百家を退けたものと同様であると批判をした。[20] このような論評は、顧頡剛は元末明初とは異なる立場に立脚して、該当時代を理解しているからではないか。

以下、顧頡剛らに批判を受けた問題を考察していきたい。宋濂は、北宋の黄晞の著作『聱隅子』に対して次のように言う。

『聱隅子』二巻、蜀の人、黄晞の撰。晞、宋の仁宗の時の人なり。獻欷瑣微論、十篇を著はす。篇に小序有り。造文は揚雄・王通の二氏に効ふも、而れども造理は逮ぶ能はず。其の張良は聖人の安を得、蕭何は聖人の変を得、劉向は聖人の力を得と謂ふは、可ならざるが似きかな。黄氏（日抄）、間ま其の語を采り、二代反て及ばざる所有りと謂ふは、知言に非ざるなり。然れども五季より以来、士習極めて陋しく、文も亦た之に隨ふ。宋に入ること殆ど将に百年にならんとするも、猶ほ未だ大いに振はず。晞独り知る「辞賦、治具に戻る。聲偶、倡優より甚だし」と。確然として論を立て、以て一家の言を成す。真に豪傑の士なるかな。真に豪傑の士なるかな。[21]（括弧内、筆者）

ここで宋濂は従来のような文献批判ではなく、『聱隅子』に対して、内容に踏み込んだ論評を行い、「豪傑の士」であると、比較的高い評価を下している。これが、自己の信じる道を基準とした分析である。本条は、純粋に古書の鑑別を行った考察ではない。しかし、このような考察こそが「諸子辨」の持つ性格を如実に表しているのではないだろうか。この道を基準とした分析が、古書の鑑別に影響を及ぼすとしたら、どのような結果に立ち至るのであろうか。

この文献批判と道との問題を『荘子』に対する考察から検討したい。

『荘子』十巻、戦国の時、蒙の人、漆園の吏、荘周の撰。内篇七、外篇十五、雑篇十一、総べて三十三篇。其の書、老子に本づき、其の学は窺はざる所無し。其の文辞は、汪洋凌厲、日月に乗じ、風雲に騎するが若く、星辰に下上し、其の之く所測ること莫し。誠に未だ及び易からざる者有り。然れども見る所高きに過ぎ、聖帝の経天緯地の大業と雖も、曾て其の一哂を満さず。蓋し所謂古の狂者を彷彿とす。惜しむらくは其の孟軻氏と時を同じくするも、一見して孔子の大道を聞かざるなり。苟くも之を聞き、則ち其の過ぎたるを損して中に就かしめば、

豈に軻の下に在らんや。ああ、周、此れを語るに足らざるなり。孔子は百代の標準、周は何人ならん。敢へて之を掊擊し、又た従ひて之を狎侮す。古より書を著はすの士、甚だ顧忌無しと雖も、亦た是れに至らざるなり。周、縦ひ日び軻に見ゆるも、其れ能く囁然として轍を改むるや。不幸にして其の書盛伝し、世の放肆を楽しみて拘検を憚る者は、周を指して以て口を藉らざる莫し。遂に礼義陵遲し、彝倫斁敗するに至りて、卒に人の家国を踣す。亦た悲しからずや。金の李純甫も亦た能言の士なるも、『鳴道集』を著し、説くに孔孟・老荘を以て同に称して聖人と為す。則ち其の沈溺の習ひ、今に至るまで猶ほ未だ息まざるなり。異説の人を惑はすや、深きかな。盗跖・漁父・譲王・説剣の諸篇、前後の文と類せず。疑ふらくは後人の勦入する所ならん。晁氏謂ふ、「孔子没して、道術散じ、老子始めて書を著はし、周起ちて之を羽翼す」と。老子の書を著はすは、孔の未だ没せざるの先に在り。[23]

本条で宋濂は、考察の末に「盗跖・漁父・譲王・説剣の諸篇、前後の文と類せず」と文章の鑑識からの分析を行い、さらに『郡斎読書志』の所説を批判している。しかし、それは一部分である。本条にみえる考察の大部分は、文献批判を大きく離れ、主観的な論評に陥っている。

本条で、特に注目すべきは、李純甫（一一八五～一二三一）の著作『鳴道集説』に対する「説くに孔孟・老荘を以て同に称して聖人と為す。則ち其の沈溺の習ひ、今に至るまで猶ほ未だ息まざるなり。異説の人を惑はすや、深きかな」[23]との批判である。宋濂は、この『荘子』に対する考察に見えるように、老荘を称賛する者に対して批判することで、聖賢の学問と異端の学問との差異を明らかにしようとしたのである。これは、聖賢の道の顕彰を目的とした「諸子辨」の性格を表すものであり、自序に見える立場を具体的に記したものと言える。

宋濂の「諸子辨」は、本条に見える老荘批判に代表される道を基準とした分析と、書誌研究や語彙研究からなる文献批判とが並存するものである。この宋濂の態度は、容易に以下のような考察をも可能とする。戦国時代の兵家の書『呉子』について次のように言う。

『呉子』二巻、衛の人、呉起の撰。起、嘗て曾子に学ぶ。其の著書、図国・料敵・治兵・論将・応変・勵士と曰ふ。凡そ六篇。夫れ干戈相ひ尋ぎ、戦国の惨に至り、往往にして智術・詐譎を以て利害の場に馳騁し、其の至を

用ひざる所無く、士無きが若し。起、斯の時に於いて、魏の武侯に対ふれば則ち曰はく「徳に在りて、険に在らず」と。制国治軍を論ずれば則ち曰はく、「之を教ふるに礼を以てし、之を勵ますに義を以てす」と。天下戦国を論ずれば則ち曰はく、「五たび勝つは者は禍なり。四たび勝つ者は弊る。三たび勝つ者は覇たり。二たび勝つ者は王たり。一たび勝つ者は帝たり。数しば勝ちて天下を得たる者は稀、以て亡ぶ者は衆し」と。将為るの道を論ずれば則ち曰はく、「慎む所の者、五あり。一に曰はく理、二に曰はく備、三に曰はく果、四に曰はく戒、五に曰はく約」と。何ぞ起の夫の諸子に異なるや。此れ西河を守り、諸侯と大いに戦ふこと七十六、全勝すること六十四なる所以にして、土を闢くこと四面、地を拓くこと千里なるも、宜なり。之を孫武に較ぶれば、則ち起は正に幾く、武は奇に一にす。其の優劣は判かれり。或る者謂へらく、「起は武の亜為り。抑そも亦た未だ之れ思はざるか。然れば則ち妻を殺し将たらんことを求め、臂を齧みて母に盟ふ、亦た取る所に在るか」と。曰はく、「姑く是れを舍け」と。[24]

本条で、宋濂は呉起の兵法を孫武の兵法よりも上であるとし、高く評価する。その上で、妻を殺して将軍となることを求めた事蹟は不問に附せとしている。しかし、このような事蹟を持つ呉起を好意的に評価するのは疑問の余地もあろう。後述するように宋濂の高弟の方孝孺は、呉起に対して大きく異を唱えている。

また宋濂は、同じ兵家の孫武に対して「嗚呼、古の兵を談ずる者は、仁義有り、節制有り。武、権術・変詐に一趨するに至り、流毒、今に至るまで未だ已まざるなり。然らば則ち武は固に兵家の祖、亦た兵家の禍首ならん」[25]とし、兵家の祖であるとするが、その内容については、『呉子』に比して極めて低い評価をしている。

ここまで検討してきたように、「諸子辨」は、文献批判と道を基準とした分析とが並存し、その目的である聖賢の顕彰に向かっていた。ただし、文献批判と道を基準とした分析は並存しながらも、結果的には交わらなかった。この文献批判が、一定の評価を受けたのである。

しかし、文献批判と道を基準とした分析とが不可分であり、聖賢の顕彰に向けて無分別に並存していることは、古書の鑑別そのものに、強い影響を与えることになるだろう。これが主観的との評価を受けた原因である。

以下、宋濂の高弟方孝孺の古書の鑑別について、文献批判と道を基準とした分析との問題を中心として考察していきたい。

五、方孝孺の古書辨偽

方孝孺、字は希直、希古。遜志と号し、正学先生と称された。建文帝に殉じたことで名高い人物である。孝孺は、宋濂の「諸子辨」に較べ、小規模であるが、古書の鑑別を行っている。その考察した書目は、『三墳書』、『夏小正』、『汲冢周書』、『司馬法』、『三略』、『子華子』、『曾子』、『荀子』、『孫子』、『呉子』、『慎子』、『公孫龍子』、『尹文子』、『鄧析子』、『尉繚子』、『戦国策』、『呂氏春秋』、『法言』、『風俗通義』、『漢塩鉄論』、『荀悦申監』、『崔豹古今註』、『博物志』、『聱隅子』である。以下、具体的に方孝孺の古書の鑑別について見ていく。[26] 先ず、その目的であるが、「周礼辨偽」(『遜志斎集』巻四)には以下のようにある。

賢人の言は偽りに為すべきも、聖人の心は千載も推して知るべきなり。其の言に求めて合はざるも、能く之を其の心に揆れば、則ち是と非とは決せり。[27]

松川健二氏は、この語を引き、「方孝孺の辨偽の態度とは、自己の描く聖人のイメージ、理想的君主像に照らして辨別してゆく體のものであった」とする。これは宋濂の「諸子辨」の手法の「道を基準とした分析」を以て古書の真偽の判断基準とするものと一致するものである。また松川氏は、宋濂および方孝孺の辨偽に対して、「両者にはほぼ共通の立場が見られ、評価の一致するものが多い」とし、「幅ひろい見方のできた宋濂にくらべ、方孝孺は自己の名教意識を唯一の尺度としていて、より主観的と言え」るとする。

確かに、松川氏の説のように両者には、多少の共通点は存在するが、後述するように呉起の評価など全く相反するものも少なくない。むしろ両者の相異こそが、主要ではないだろうか。

さて、その目的は宋濂と同様のものが確認できる。しかし、その手法については、方孝孺は宋濂の影響を受けるも

のの、少しく異なる。方孝孺の手法が具体的に示されているのは、「読三墳書」である。『三墳書』は、南宋の鄭樵（一一〇四～一一六二）が信じるなど、[28] 議論が多いが方孝孺は偽書とする。だが、注目すべきは『三墳書』に対する考察中に、古書を鑑別する上での三種の方法を提示していることである。

書の名は真なるも、実は偽なる者多し。何に従りて之を信ぜんや。亦た審らかに之を辨ずるに在るのみ。辨ずるの法に三有り。其の辞を味はひ、以て其の世の先後を望み、其の名を正して、以て其の事の是非を求め、諸を道に質し、以て其の旨の浅深を索むれば、真偽の匿るる所無し。吾嘗て是れを執りて以て天下の書を観るに、蓋し十に一も失はず。[29]

方孝孺は古書の鑑別の手法として「其の辞を味はひ、以て其の世の先後に望」む、「其の名を正して、以て其の事の是非を求む」る、「諸を道に質し、以て其の旨の浅深を索む」るの三種を提示している。この手法を行えば、「真偽の匿るる所無し」とし、さらに「十に一も失はず」と自負している。方孝孺は、「辞」と「名」と「道」、つまり古書の時代性、内容の齟齬からなる文献批判と、道を基準とした分析とを用いるものである。宋濂と異なり、明白に方法論を述べている。では、実際に方孝孺の古書鑑別を『呉子』に関する考察から検討したい。

衛の人、呉起の書、六篇、兵書なり。起、嘗て学を曾子に受く。故に其の書、間ま仁義を談ず。然れども起、烏くんぞ以て仁義を知るに足らんや。起、嘗て婦を殺して将たらんことを求め、臂を嚙りて母に盟ふ。其の天資、固に刻忍の人なり。是れを以て曾子の門に棄てられ、卒に兵を以て顯る。其の兵を論ずるを観れば、則ち孫武の亜なり。而れども武の説、明備為り。起嘗て魏の武侯と言ふ、「徳に在りて、険に在らず」と。信に戦国の時の名言なり。特だ以て行ふ無く、世に少とせらるるも、亦た以て聖人の教の人に入るは深きを見るべし。是非の公、終に泯ぶべからず。ああ、豈に功を喜ぶ者の戒と為すに足らざるや。[30]

方孝孺は、呉起の「徳に在りて、険に在らず」を戦国の名言と評価する。この点は宋濂も同様である。しかし、呉起に対しては、宋濂とは異なり、極めて低い評価である。方孝孺は、呉起は曾参に学んだが、仁義を知ることが出来なかったと批判し、さらに妻を殺して、魯の将軍となったことや、母の腕を嚙んだ事蹟に対し、「刻忍」の人である

と厳しい批判をしている。その上、宋濂が『孫子』よりも上であると評価したその兵法についても、孫子の兵法の亜流に過ぎないとし、全く評価していない。この方孝孺の呉起に対する評価は、先に見た宋濂の呉起に対する高い評価とは対象的である。本条は、古書を鑑別したのではなく、読書録的なものである。その為に方孝孺の手法のうち「道」、つまり道を基準とした分析に大きく依存した論評となっている。方孝孺のこの態度は、古書の鑑別の結果にまで及んでいる。

続いて、この「道」の問題を司馬穰苴の著作とされる『司馬法』に関する考察から検討したい。

周の司馬に用兵の法有り。斉の威王に至りて、田穰苴の遺書を尊用し、古の司馬法を追論せんと欲し、穰苴の書を其の中に附し、司馬穰苴司馬法と号す。漢の芸文志、百三十篇、今に伝ふる所は五篇。蓋し周書の存する者寡し。而れども其の言論猶ほ先王の遺意有り。先王の兵、武を黷し勝を好むに非ざるなり。将に乱を止めんとするのみ。此の書の所謂「戦を以て戦を止む」は、之を得たり。先王の兵、民を愛するを以て本と為す。此の書の所謂「凶に因らず、喪を加へず」、「冬夏は師を興さざる」は、之を得たり。先王の世、兵を農に寓し、農隙に武を講ず。此の書の所謂「戦を忘るれば必ず危ふし」は、之を得たり。徳を以てし、力を以てせざるは、王道の盛なり。此の書の所謂「六徳」なる者に非ざるか。名を正して詭を尚ばざるは、王道の要なり。此の書の所謂「偏く諸侯に告ぎ、有罪を彰明する」者に非ざるか。所謂「賢を挙げ、明を立て、厥の職を正復す」は、則ち滅を興し絶を継ぐの事なり。所謂「仁を以て本と為し、義を以て之を治む」は、則ち王者の政、文武の由りて興る所なり。是くの若き者は、穰苴の能言する所に非ず。其の遺書為るは疑ひ無し。駁にして純ならず、譎りて正ならざる者有るに至りては、則ち皆な穰苴の法、亦た戦国の兵を談ずる者の能く及ぶ所に非ず。蓋し兵書の道に近き者なり。ああ、王者の作らざるや久し。人心の趨下するや、日に以て滋す。是に於いて英君謀士、譎詐を以て奇と為し、屠戮を以て武と為す。唐の太宗・李靖の問答の若きは、惟だ孫呉の術有るを知りて、『司馬法』を虚語と為す。況んや孫呉の忍びざるの言より出ずる者有るをや。悲しいかな。[31]

方孝孺は、『司馬法』仁本第一に見える「戦を以て戦を止む」等を高く評価し、これを「先王の遺意」とし、古来

の『司馬法』であるとしている。これとは逆に、自身が「先王の遺意」と思うことの出来ない箇所を、田穰苴（司馬穰苴）のもの、もしくは後出の虚語であると判断しているのである。これは明確に、文献批判と道を基準とした分析が混在しており、古書の鑑別の結果に大きく影響を及ぼしている。

方孝孺は、師の宋濂に影響を受け、三種の手法を立て、自身の古書の鑑別に応用していった。つまり、古書を鑑別する技術は、方孝孺は宋濂よりも精密な立場を取っている。しかし、方孝孺は、特に道を基準とした分析に重点を置き、古書を鑑別している。そのため、自己の手法を忠実に行った場合、方孝孺の結論は、宋濂よりも穏当性を欠くという結論に至るのである。

結語

本稿は、元末明初の思想の一端を明らかにするために、宋濂と方孝孺の古書辨偽が如何なる目的のもと、如何にして古書を分析したかについて考察を行った。

宋濂は、「諸子辨」自序に見えるように、聖賢と異端との差異を明らかにするために、古書を鑑別し、その手法として、書誌分析と語彙分析からなる文献批判と、道を基準とした分析という二点を用いていた。しかし、文献批判による分析と道を基準とした分析は不可分の関係にあり、並存していた。

方孝孺は、宋濂に影響を受け、それを推し進め、古書の時代性、内容の齟齬、道を基準とした分析からなる三種の手法を立てた。しかし、方孝孺は宋濂と比して、特に道に重点を置いたため、文献批判と道を基準とした分析とが混在し、そのため宋濂よりも穏当性を欠いたものとなった。

宋濂や方孝孺にとって古書辨偽とは、単に古書を鑑別する行為では無く、聖賢を顕彰するものであった。元末明初における古書辨偽は、後に評価された文献批判の側面が、如何に高度になった所で、それのみでは成立せず、評価されなかった道による分析こそが最も重要な点であったのである。ここに元末明初の古書辨偽の特徴が表れている。純

粋に古書の鑑別のみを目的とせず、聖賢の顕彰や、聖賢と異端との差異を明らかにすることを目指していたため、後世言われるような主観性を排除するなどは、到底有り得なかったのである。この評価されなかった道を基準とした分析に比重を置き、古書の鑑別を行った最も典型的な例を方孝孺は示している。

これは確かに、清朝考証学や疑古派の立場に立つならば、主観的と映り、学問の停滞ないし後退と映るであろう。しかし、文献批判と道を基準とした分析との並存ないし混在こそが、清朝考証学と元末明初における古書辨偽との決定的な相異であり、これこそが元末明初における古書辨偽の性格を如実に表すものなのである。

元末明初における古書辨偽とは、文献批判による分析のみではなく、それぞれの考える道を基準とした分析が並存していた。後に評価された文献批判は、彼らの主としたものではなく、評価されなかった道を基準とした分析こそが、元末明初における古書辨偽を代表するものであったのである。

〔注〕

(1) 島田虔次『中国における近代思惟の挫折』(筑摩書房、一九四七年。『同』改訂版、一九七〇年) 荒木見悟『明代思想研究』(創文社、一九七二年) 等を参照。

(2) 佐野公治「宋明時代のいわゆる「心学」について」(『山下龍二教授退官記念中国学論集』所収、研文社、一九九〇年)

(3) 三浦秀一『中国心学の稜線—元朝の知識人と儒道仏三教—』(研文出版、二〇〇三年)

(4) 楊緒敏『中国辨偽学史』前言 (天津人民出版社、一九九三年) 及び、張富祥『宋代文献学研究』(上海古籍出版社、二〇〇五年) 第五章「辨偽学」に詳しい。

(5) 羅月霞主編、浙江古籍出版社、一九九九年。本稿で取り扱う「諸子辨」は、四部叢刊本『宋学士全集』には含まれておらず、金華叢書本『潛溪集』(巻二十七、雑著) の中に含まれる。なお、本稿は『宋濂全集』の校点にはよっていない。

(6) 宋濂の「諸子辨」に関しては、金谷治「疑古の歴史」(『金谷治中国思想論集』下巻、平河出版社、一九九七年) のほか、楊氏前掲書「宋濂与『諸子辨』」、王嘉川『布衣与学術—胡応麟与中国学術史研究』(商務印書館出版、二〇〇五年) 「『諸子

辨』性質考辨」などで言及されている。

(7) 三浦氏は諸子辨を「諸子書に対する先人の見解を点検しつつ、諸子書の真偽を弁別することを目的とした書物である」としている。三浦氏前掲書四〇九頁。

(8) 諸子辨者、何。辨諸子也。通謂之諸子何。周秦以来、作者不一姓也。作者不一姓而其立言何。人人殊也。先王之世、道術咸出於一孔、此其人人殊何。各奮私知。而或鑑大道也。曰或鑑大道也、其書雖亡、世復有依倣而托之者也。然則子将奈何。辞而辨之也。曷為辨之。解惑也。

(9) 王嘉川氏は「諸子辨は、辨偽の内容はあるものの、辨偽の書ではない」とする。王氏前掲書二〇七頁。

(10) 作諸子辨数十通、九家者流、頗具有焉。孔子門人之書、宜尊而別之。今亦俯就其列者、欲備儒家言也。始之以『鬻子』、而終之以周程者、欲読者有所帰宿也。

(11) 大抵、古書之存於今者、多出於後人之手。如『孔子家語』謂為孔安国所録壁中之文、往往多鈔『左伝』・『礼記』諸書。特稍異其辞耳。善読者、固不敢与之。世伝賈誼『新書』謂誼所作、亦不過因過秦論・弔湘賦、而雑以『漢書』中語足之。似非誼本書也。此猶有所附麗而然。

(12) 文章の鑑識とは、例えば、『孔叢子』に対し「兼之気質萎弱、不類西京以前文字。其偽妄昭然可見」とするように、文章の気魄や雰囲気がその時代に合うかを分析するものである。

(13) 『鬻子』一巻、楚鬻熊撰。熊為周文王師、封為楚祖。著書二十二篇、蓋子書之始也。芸文志屬之道家、而小説家又別出十九巻。今世所伝者、出祖無択所蔵、止十四篇。『崇文総目』謂其八篇已亡。信矣。其文質、其義弘、実為古書無疑。第年代久邈、篇章舛錯、而経漢儒補綴之手、要不得為完書。黄氏疑為戦国処士所託、則非也。序称「熊見文王時、年已九十」其書頗及三監・曲阜時事。蓋非熊自著。或者其徒名政者之所記歟。不然、何有称「昔者文王有問於鬻子」云。

(14) 『黄氏日抄』巻五十五、読諸子『鬻子』「鬻子名熊、逢行珪序、其書云熊楚人、年九十見文王。王曰老矣。熊曰使臣捕獣逐麋已老矣。使臣坐策国事尚少也。文王遂師之。故其書首之、以文王問。此必戦国処士仮託之辞」

(15) 『中興舘閣書目』は、宋の南渡以後に編纂された宮廷蔵書の目録である。『直斎書録解題』巻八「『中興舘閣書目』三十巻」

に「秘書監、臨海陳騤叔進等撰。淳熙五年上之。中興以来、庶事草創、網羅遺逸、中秘所蔵、視前世、独無歉焉。殆且過之。大凡著録四万四千四百八十六巻。蓋亦盛矣。其間攷究疏謬、亦不免焉」とある。

(16)『李氏書目』は、『郡斎読書志』に散見されるが、詳細不詳。なお『宋史』芸文志に『李淑邯鄲書目』十巻、及び『李徳芻邯鄲再集書目』三十巻が挙がっている。

(17)「周氏」とは、『周氏涉筆』を指す。なお『周氏涉筆』については、全衛敏「周氏『涉筆』考」(『古籍整理研究学刊』二〇〇七年、第一期)がある。全氏は、『文献通考』所引の『涉筆』の内、一条のみが「西麓周氏曰」としている点に注目し、『周氏涉筆』の著者を、周端朝(一一七二〜一二三四)字は子静、子靖、号は西麓、とする。

(18)『六韜』、謂出於周之呂牙、而有「避正殿」之語、殊不知「避正殿」乃戦国後事。『爾雅』、以為周公所制、而有「張仲孝友」之言。殊不知張仲乃周宣王時人。予嘗験古書真偽、毎以是求之、思過半矣。又況文辞気魄之古今絶然不可同哉。予因知統之序、蓋後人依托者也。嗚呼、豈独序哉。

(19)『亢倉子』五巻、凡九篇。相伝周庚桑楚撰。予初苦求之不得。及得之、終夜疾読。読畢嘆曰「是偽書也。勦老荘文列及諸家言而成之也」其言曰「危代以文章取士、則剪巧綺繿益至、而正雅典実益蔵」夫文章取士、近代之制、戦国之時無有也。其中又以人易民、以代易世、世民、太宗諱也。偽之者、其唐士乎。予猶存疑而未決也。後読他書、果謂天宝初、詔号『亢桑子』為『洞霊真経』。求之不獲、襄陽処士王士元采諸子文義類者、撰而献之。其説頗与予所見合。復取読之、益見其言詞不類。因棄去不復省。農道一篇雖可読、古農家書具有之。或者謂可孤行、吾亦不知其為何説也。

(20) 顧頡剛主編『古籍考辨叢刊』第一集(中華書局、一九五五年)、顧頡剛「諸子辨」序文に、「老実説、在現在時候、這些著作是早該没有価値的了。即如此書、試看宋濂在序跋中所説的話、成見何等的重、態度何等的迂腐、彼簡直是董仲舒請罷百家的口気」とある。さらに、同序には「他是用善悪功過的信条来論定古書的真偽的。這種的観念、在現在的学術界裏是絶対站不住的了」とあり、やはり強く批判している。また楊緒敏氏もこの説をほぼ襲う。楊氏前掲書、一二二頁。

(21)『聱隅子』二巻、蜀人黄晞撰。晞、宋仁宗時人。著獻欷瑣微論十篇。篇有小序。造文効揚雄・王通二氏、而造理不能逮。其謂張良得聖人之安、蕭何得聖人之変、劉向得聖人之力者、似不可哉。黄氏間采其語、謂二代反有所不及、非知言也。然自

五季以来、士習極陋、而文亦隨之。入宋代将百年、而猶未大振。晞独知「辞賦戾乎治具。聲偶甚乎倡優」確然立論、以成一家言。真豪傑士哉、真豪傑士哉。

(22)『荘子』十巻、戦国時、蒙人、漆園吏、荘周撰。内篇七、外篇十五、雑篇十一、総三十三篇。其書本『老子』、其学無所不窺。其文辞汪洋淩厲、若乗日月、騎風雲、下上星辰、而莫測其所之。誠有未易及者。然所見過高、雖聖帝経天緯地之大業、曾不満其一哂。蓋彷彿所謂古之狂者。惜其与孟軻氏同時、不一見而聞孔子之大道。苟聞之、則其損過就中、豈在軻之下哉。嗚呼、周不足語此也。孔子百代之標準、周何人。敢掊擊之、又従而狎侮之。自古著書之士、雖甚無顧忌、亦不至是也。周縦日見軻、其能幡然改轍乎。不幸其書盛伝、世之楽放肆而憚拘検者、莫不指周以藉口。遂至礼義陵遲、彝倫斁敗、卒蹈人之家国、不亦悲夫。金李純甫亦能言之士、著『鳴道集』、説以孔孟・老荘同称為聖人。則其沈溺之習、至今猶未息也。異説之惑人也、深矣夫。盗跖・漁父・譲王・説剣諸篇、不類前後文。疑後人所勦入。晁氏謂「孔子没、道術散、老子始著書、周起而羽翼之」老子著書、在孔未没之先。

(23)「諸子辨」以外にも、宋濂は李純甫を批判している。「其名純甫者……又力探性理及身毒氏学、作一書曰『鳴道集説』其書甚偏、詆駁伊洛諸儒無寸完、至以老荘二子与孔孟同称為聖人、時名流頗傾下之。晩以其志不遂、日以文酒為事、嘯歌祖裼、出礼法外」(『宋学士文粋輯補』「題金諸儒手帖後」)

(24)『呉子』二巻、衛人、呉起撰。起嘗学於曾子。其著書曰、図国・料敵・治兵・論将・応変・勵士。凡六篇。夫干戈相尋、至於戦国慘矣、往往以智術・詐譎、馳騁於利害之場、無所不用其至、若無士矣。起於斯時、対魏武侯則曰「在徳、不在険」論制戦治軍則曰「教之以礼、勵之以義」論天下戦国則曰「五勝者禍。四勝者弊。三勝者覇。二勝者王。一勝者帝。数勝得天下者稀、以亡者衆」論為将之道則曰「所慎者五、一曰理、二曰備、三曰果、四曰戒、五曰約」何起之異夫諸子也。此所以守西河、与諸侯大戦七十六、全勝六十四、闢土四面、拓地千里、宜也。較之孫武、則起幾於正、武一乎奇、其優劣判矣。或者謂「起為武之亜。抑亦未之思歟。然則殺妻求将、齧臂盟母、亦在所取乎」曰、「姑舎是」

(25)『孫子』一巻……嗚呼、古之談兵者、有仁義、有節制。至武一趍於権術変詐、流毒至於今未已也。然則武者固兵家之祖、亦兵家之禍首歟。

(26) 方孝孺の古書辨偽は、松川健二「方孝孺試論」(『日本中国学会報』第十九集、一九六七年)に言及されている。以下、引用は松川氏論文に拠る。

(27) 賢人之言可偽為也、聖人之心千載可推而知也。求其言而不合、能揆之於其心、則是与非決矣。

(28) 『通志』巻六十三『三皇太古書』「如緯書、猶見取於前世。況此乎。且『帰蔵』至晋始出、『連山』至唐始出。然則『三墳』始出於近代、亦不為異事也」

(29) 『遜志斎集』巻四、読三墳書「書之名真、而実偽者多矣。何従而信之哉。亦在審辨之爾。辨之法有三。味其辞、以望其世之先後、正其名、以求其事之是非、質諸道、以索其旨之浅深、而真偽無所匿矣。吾嘗執是以観天下之書、蓋十不失一焉」

(30) 『遜志斎集』巻四、読呉子「衛人、呉起書六篇、兵書也。起嘗受学於曾子。故其書、間談仁義。然起烏足以知仁義哉。起嘗殺婦而求将、嚙臂与母盟。其天資、固刻忍之人。是以見棄於曾子之門、而卒以兵顯。観其論兵、則孫武之亜也。而武之説為明備矣。起嘗与魏武侯言「在徳、不在険」信戦国時之名言。特以無行、見少於世、亦可以見聖人之教入人者深。而是非之公、終不可泯也。於乎、豈不足為喜功者之戒哉。

(31) 『遜志斎集』巻四、読司馬法「周司馬有用兵之法。至斉威王、欲尊用田穰苴遺書、追論古司馬法、附穰苴之書於其中、号司馬穰苴司馬法。漢芸文志百三十篇、今所伝者五篇。蓋周書之存者寡矣。而其言論猶有先王之遺意焉。先王之兵非黷武好勝也、将止乱而已。此書所謂「以戦止戦」者、得之。先王之兵以愛民為本、此書所謂「不因凶、不加喪」、「冬夏不興師者」、得之。先王之世寓兵於農、農隙講武。此書所謂「忘戦必危」者、得之。以徳不以力、王道之盛也。非此書所謂「六徳」者乎。正名而不尚詭、王道之要也。非此書所謂「偏告諸侯、彰明有罪」者乎。所謂「挙賢、立明、正復厥職」、則興滅継絶之事也。所謂「以仁為本、以義治之」、則王者之政、文武之所由興也。若是者非穰苴所能言、其為遺書無疑。至有駁而不純、譎而不正者、則皆穰苴之法、而亦非戦国之談兵者所能及、蓋兵書之近道者也。嗚呼、王者之不作也久矣。人心之趨下也、日以滋矣。於是英君謀士以譎詐為奇、以屠戮為武。若唐太宗・李靖之問答、惟知有孫呉之術、而司馬法為虚語矣。況有出於孫呉之不忍言者乎。悲夫」